

氏 名	リュウ ミョウ 劉 森
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	人博 第 114 号
学位授与の日付	平成 29 年 9 月 30 日
課程・論文の別	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 名	『金瓶梅詞話』における“畢”・“罷”・“訖”の研究
論 文 審 査 委 員	主査 准教授 荒木 典子 委員 教 授 佐々木 睦 委員 教 授 落合 守和

【論文の内容の要旨】

本研究の目的は、『金瓶梅詞話』における特徴的な文法現象のうち、“畢”・“罷”・“訖”について、ほかの四つの明清白話小説と比較しながら考察することにある。

主に論ずるのは次の四つの課題である。

- ア 五つの作品の“畢”・“罷”・“訖”について、それぞれの用例における特徴を明らかにする。三者を用いた形式における語順のみならず、共起する語彙や、文体の差異などについても検討する。
- イ 明清白話小説に非常に多く見られる“畢”・“罷”・“訖”の会話文（実際に口に出したもののほか心で思ったことも含む）の後ろにおける用法を本論では接続用法、と定義する。各作品における“畢”・“罷”・“訖”の接続用法の用例を検討する。
- ウ “畢”・“罷”・“訖”の用例に注目して『金瓶梅詞話』とそのほかの明清白話小説を比較し、『金瓶梅詞話』における“畢”・“罷”・“訖”の特徴を明らかにする。
- エ “畢”・“罷”・“訖”を用いた形式の語順を、“了”を用いた形式の語順と比較する。“了”を用いた形式の変化については、先行研究では「前移説」、「後加説」が提示されているが、“畢”・“罷”・“訖”を用いた形式も“了”と同様な変化を辿ったのかどうか検討する。

第一章

本研究の目的、対象、方法、資料、先行研究のまとめおよび再検討すべき点等を提示する。先行研究における「V+O+了」（Ⅰ型語順）と「V+了+O」（Ⅱ型語順）について検討し、“了”を用いた形式の変化過程については、前移説と後加説の 2 つの説それぞれの合理性と

不足している点を整理した上で、本研究では蔣紹愚（2005）の説を支持する。つまり、述語動詞が Vt の場合は前移の可能性が高く、Vi の場合は後加の可能性が高いと考える。

第二章

本研究の主な資料である『水滸傳』、『西遊記』、『金瓶梅詞話』、『紅樓夢』、『兒女英雄傳』における“畢”の用例を分析、検討する。

“畢”について、以下のことが指摘できる。

- ① 先秦兩漢時代から明清時代まで“畢”は広く使用されていた。その形式は「V（+O）+畢」と「名詞（+副詞）+畢」である。一方、明代になると、「V+畢+O」の形式の用例が多く用いられるようになった。
- ② 本研究で取り上げた明清白話小説すべてにおいて用例が見られる。
- ③ 作品により、“畢”の虚化（本来の意味が弱まり、文法的な役割を負うようになること）の度合いも異なっている。また、明代から清代になって“畢”の虚化の度合いが高くなったとは言えない。
- ④ “畢”は様々な語彙と共起でき、広く使われている。二音節（以上）の語彙と共起しやすい。単音節の語彙と共起する用例は比較的少ない。単音節の語彙と共起する場合、言語系語彙が多く、接統用法として用いられている。
- ⑤ 本研究で取り上げた白話小説においては、基本的にはⅠ型が多く見られるが、『金瓶梅詞話』にのみⅡ型の用例が多く見られる。
- ⑥ “畢”が“了”と併用されている用例はごく少数である。
- ⑦ “畢”が A タイプの場合、副詞挿入の用例も多く見られる。そのほとんどは“已”である。否定副詞の場合は全用例において“未”が用いられている。
- ⑧ 接統用法の用例は作品により、占める割合も異なっている。特に『金瓶梅詞話』と『紅樓夢』には用例が多い。

第三章

本研究の主な資料である『水滸傳』、『西遊記』、『金瓶梅詞話』、『紅樓夢』、『兒女英雄傳』における“罷”の用例を分析、検討する。

“罷”について、以下のことが指摘できる。

- ① “罷”は南北朝時代からすでに用例が見られるが、広くは使われていなかった。“罷”の形式は「V（+O）+罷」と「名詞（+副詞）+罷」である。一方、明代になると、「V+罷+O」の形式の用例が多く用いられるようになった。
- ② 本研究で取り上げた明清白話小説においては、“罷”の用例はすべての作品において見られる。しかし、全体的には“罷”の用例数は“畢”よりやや少ない。
- ③ “罷”の虚化の度合いは作品により違いが見られるが、比較的高いといえる。
- ④ 明代と清代の作品を比較すると、虚化の度合いには相違が見られない。

- ⑤ “罷”は様々な語彙と共起でき、広く使われている。二音節（二音節以上）の語彙と共起しやすい。単音節の語彙と共起する用例は比較的少ない。単音節の語彙と共起する場合、言語系語彙が多く、接続用法として用いられている。とりわけ、『水滸傳』における用例数が多い。
- ⑥ I型とII型の用例の多寡は作品により、異なっている。特に目立った傾向は見られない。
- ⑦ “罷”が“了”と併用されている用例はごく少数である。
- ⑧ 副詞挿入の用例も多く見られる。そのほとんどは“已”である。否定副詞の場合は全用例において“未”が用いられている。
- ⑨ 接続用法の用例が多く見られる。特に、『水滸傳』において、前置する動詞の種類が多い。

第四章

本研究の主な資料である『水滸傳』、『西遊記』、『金瓶梅詞話』、『紅樓夢』、『兒女英雄傳』における“訖”の用例を分析、検討する。

“訖”について、以下のことが指摘できる。

- ① “訖”は南北朝時代からすでに用例が見られるが、形式は「V（+O）+訖」である。
- ② 本研究で取り上げた明清白話小説においては、“訖”の用例はすべての作品において見られるわけではない。しかも、全体的に用例数は少ない。
- ③ 虚化の度合いが比較的高い。明代と清代の作品を比較すると、虚化の度合いの相違は見られない。
- ④ 共起する語彙が少なく、ほとんどは固定表現である。単音節の語彙と共起しやすい。
- ⑤ ほとんどII型の用例である。
- ⑥ “了”と併用している用例は見られない。
- ⑦ 副詞挿入の用例も見られない。
- ⑧ 接続用法の用例が多く見られる。
- ⑨ 「V+訖+回数」の形式は“訖”のみに見られる。

第五章

“畢”・“罷”・“訖”の接続用法を分析した。接続用法の歴史にも触れ、新旧の接続用法を比較した。

本研究の資料に見られる接続用法の用例について、以下のことが指摘できる。

- ① それぞれの作品に見られる“畢”・“罷”・“訖”の全用例数と接続用法の用例数は比例する。特に『水滸傳』と『兒女英雄傳』の“罷”、『金瓶梅詞話』と『紅樓夢』の“畢”は用例数が多いため、接続用法の用例数も多い。接続用法としては作品によって“畢”・“罷”のどちらか一つが多用される傾向がある（ただし、『西遊記』は例外である。）例えば、『水滸傳』では“罷”が多用されるのに対して、“畢”の用例は少数に留まる。一

- 方、『金瓶梅詞話』では“畢”が多用されるのに対して、“罷”の用例は少数に留まる。
- ② “訖”は用例数が全体的に少ない。

新旧の接続用法について、比較を行った。旧式では、“曰”/“云”を前置することでそれ以降が会話文であることを示す。新式では、“道”が“曰”/“云”と同じ役目を担い、さらに会話文の後に“～畢”/“～罷”/“～訖”を後置する。“说”、“说完”などは現代語でも会話文の前後で使用されている。英語では“say”などが用いられる。それぞれの特徴について、簡単に比べてみよう。便宜上、全て「言う」を表す語を例とする。

“説”の位置の比較

位置	会話文に前置	会話文に後置
古代漢語	曰：“……”	×
近代漢語	曰/説/(説)道：“……”	(道)“……” 説畢
現代漢語	说(道)：“……”	“……”(这样)说(完)/说着/说道
英語	say “……”	“……” said
日本語	言った。「……」	「……」と言った。

古代漢語に見られる接続用法で使用される“曰”は、会話文や経典からの引用文の前に置かれた。一方、明確に会話文が終わったことを示すための新しい接続用法として用いられる“説畢”などは、会話文の後ろに置かれる。しかし、現代漢語になると、“说”などは接続用法としての用例は会話文の前後両方に置くことが可能である。また、日本語の「言う」や英語の“say”は、文の前後どちらにも置かれ、比較的自由である。今後の課題として、接続用法の類型論的研究について検討したい。

第六章

“畢”・“罷”・“訖”から見た『金瓶梅詞話』の特徴をまとめる。

- ① II型語順が多用される。『金瓶梅詞話』では“畢”・“罷”・“訖”全てにおいてIよりもIIの用例の方が多い。
- ② 特殊な形式の用例が見られる。『金瓶梅詞話』における“訖”の用例の形式にはその他の白話小説では見られないものがある。それは、「V+訖+回数」の用例である。
- ③ 畢”が多用される『金瓶梅詞話』には“畢”の用例が非常に多く見られる。本研究で挙げたその他の白話小説よりはるかに多い。“畢”の用例のうち半数を占めているのは接続用法で、中でも“説畢”は接続用法の用例の半数以上を占めている。

第七章

“完”は“畢”・“罷”・“訖”と異なり、明清以前の使用例は少ない。第七章では、余論として“完”の通時的変化を概観する。“完”については、以下のことが指摘できる。

- ① 明末から清代にかけて、白話小説における“完”の用例数は大幅に増えている。“完”の性質の変化も見られる。今回調査した明代の白話小説には比較的“完”の用例数が少ない。しかも、動詞としての用例がほとんどであり、動詞の補語としての用例は少ない。ただ『金瓶梅詞話』のみ、補語としての用例の割合が多かった。清代になると、“完”の用例数が多くなり、しかも動詞の補語としての用例が増えている。“完”は現代まで動詞としても補語としても用いられている。
- ② “完”は明代以降、「終わる、終える」の意味を表す用例が増えて完了動詞となり、その意味でのみ補語に使われるようになった。今回の調査では古来の意味を保持したまま補語になった例（つまり現代語でいう“学好”のような意味の“学完”）がない。既に存在していた「V+完了動詞（畢・罷・訖）」からの類推により、完了動詞となった“完”がこの形式に用いられるようになった、という説もある。
- ③ 元代から清代のそれぞれの時代の言葉遣いを反映している漢語の教科書『老乞大』においては、“完”の通時的変化が明確に現れている。元代と明代の言葉の特徴を反映している版本には“完”の用例は皆無である。一方、清代の言葉の特徴を反映している版本には“完”が多用されている。元明の刊本では本動詞「終わる」及び補語「～し終える」いずれの用法も“了”が担っていたが、清代の刊本では“完”がその役目を担うようになった。
- ④ “完”は多くの語彙と共起でき、広く使われている。
- ⑤ “完”は地の文と会話文どちらかに多く使われているとは言えない。“完”は“了”と同様、非常に生産性が高い。
- ⑥ 先述した「V+訖+回数」の形式は“畢”・“罷”には見られないが、“完”は、「V+完+回数・量」の用例が多数見られる。

第八章

本研究の目的で挙げた四つの課題の結論は、以下の通りである。

ア “畢”・“罷”・“訖”の特徴は以下の通りである。

- ① “畢”・“罷”・“訖”は地の文に多く用いられている。会話文での用例も極めて少数ながら見られるが、明清白話小説においては、“畢”・“罷”・“訖”は地の文専用と言える。地の文では、三者ともに接続用法の用例が比較的多く見られる。民国期以前は句読点がまだ体系的に整備されていないため、会話文（実際に口に出したものと心の中で思ったもの）と地の文などを明確に区別するために多用されていたと考えられる。接続用法の用例は、固定化された表現がほとんどである（“説畢”など）。
- ② “畢”・“罷”・“訖”三つのうち、用例数が比較的多いのは“畢”・“罷”である。また、用例の内訳を見ると、両者は本動詞としての用例と、ほかの動詞の補語としての用例がそれぞれ一定の割合を占めている。

- ③ “畢”・“罷”は、“了”と併用されている用例も少数見られる。(「V+“了”+O+“畢”/“罷”」、「V+“畢”/“罷”(+O)+“了”」、「V+“罷”+“了”+O」、「N+“畢”+“了”」など。)
 - ④ “畢”・“罷”は、色々な動詞や名詞と結びつくことができる。
 - ⑤ “畢”・“罷”が本動詞として用いられている例の中には、副詞が挿入される例が見られる(S+副詞+“畢”/“罷”)。また、副詞の中では“已”と共起しやすく、否定を表す副詞は“未”のみである。“訖”は副詞と共起できない。
 - ⑥ 用例のタイプ別割合(動詞として使われているか、それともほかの動詞の補語として使われているか)と、副詞が挿入される用例の割合から見ると、虚化の度合いは、“訖”が最も高く、“罷”はその次であり、“畢”が最も低い。
 - ⑦ 使われている用例数から見ると、“畢”が最多である。その次は“罷”で、“訖”が最も少ない。ただ、“畢”と“罷”の間の差はそれほど大きくない。作品によって、“畢”より“罷”が多用される場合もある(『金瓶梅詞話』は“畢”、『水滸傳』は“罷”)。“畢”・“罷”両者と比べると、“訖”の用例数ははるかに少ない。また、“訖”の場合、明代より、清代の用例数が減っている。
 - ⑧ “畢”・“罷”には、先行する動詞が目的語をとる場合、Ⅰ型(VOVw)とⅡ型(VVwO)の二パターンがある。大部分の作品においてⅠ型語順の用例数はⅡ型の語順の用例数を上回る。一方、“訖”の場合は、先行する動詞が目的語をとることが少なく、「V+“訖”」の語順になる。
 - ⑨ “畢”・“罷”は共起する語彙が多く、その意味範疇も広い。一方、“訖”と共起する語彙は少なく、ほとんどが固定表現である。
 - ⑩ 『金瓶梅詞話』の“訖”だけ「V+“訖”+回数」の形式が用いられている。“畢”・“罷”にはこのような用例が見当たらない。
 - ⑪ 接続用法の用例にも、三者の間には差が見られる。“畢”の場合は、“説畢”が最も多く、“罷”の場合は、“聴罷”が最も多い。“訖”の場合は、“説訖”と“聴訖”はほとんど見られず、“言訖”が多く見られる。明代には“想畢”、“想罷”という表現は見られなかったが、清代になると、見られるようになる。
 - ⑫ “畢”・“罷”は“了”と併用できるのに対して、“訖”は“了”と併用できない。
- イ 接続用法の用例は非常に多く見られ、しかも“畢”・“罷”・“訖”の用例数全体においても、大きな割合を占めている。これは明清以前の文献には見られないものである。一方“畢”・“罷”・“訖”と似たような使い方が見られる“完”には、この用法の多用は見られない。
- ウ 『金瓶梅詞話』ではⅠ型(V+O+Vw)よりも“畢”・“罷”・“訖”のⅡ型(V+Vw+O)の語順が多用されている。この点については、その他の明清白話小説と異なっている。
- エ “畢”・“罷”・“訖”を用いた形式に関しては、Ⅰ型(V+O+Vw)の語順の用例が多

数存在し、Ⅱ型（V+V_w+O）の語順の用例は明代になってから、次第に多く見られるようになった。この点から見ると、Ⅰ型語順からⅡ型語順へと変化したことが分かる。つまり、“畢”・“罷”・“訖”が先行する動詞に密着したと考える「前移説」の説明が妥当である。“畢”・“罷”・“訖”は当初Ⅰ型の用例が多く存在し、Ⅱ型の用例は少数であった。それに、“畢”・“罷”・“訖”は“了”と異なり「Vi+“畢”/“罷”/“訖”」の用例がそもそも存在していない。従って、「後加説」の説明が適用できない。